様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 5 月 8 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2005～2008
課題番号：17592247
研究課題名（和文）
未熟児とその母親の母子関係形成過程の変化とその要因に関する縦断的研究
研究課題名（英文）
The study about follow-up of premature babies and mothers regarding infant－mother relationships

研究代表者
大井　伸子（OOI　NOBUKO）
岡山大学・大学院保健学研究科・准教授
研究者番号：60155041

研究成果の概要：
本研究は、未熟児（超・極低出生体重児）を出産した母親とその児の母子関係形成のための支援策の検討を目的に実施した。その結果、1)母親に対する出産時のストレスへの心のケア、2) 母乳分泌の維持は母親の役割獲得の面からも重要であり、継続した母乳育児支援、3)母親と児との愛着形成とパートナーを中心とした家族全体の関係づくり、4)退院後、医療機関や公的保健機関が連携した地域での育児支援体制づくり、5)児の発達経過の良否は母親に与える影響が大きく、母親への十分且つ正しい情報の提供の重要性が示唆された。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2005 年度	500,000	0	500,000
2006 年度	500,000	0	500,000
2007 年度	500,000	150,000	650,000
2008 年度	400,000	120,000	520,000
年度			
総　計	1,900,000	270,000	2,170,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学
キーワード：低出生体重児，母子関係，愛着形成，育児不安，育児支援

１．研究開始当初の背景

現在、日本国内で出生する新生児の 9.6%が低出生体重児であり（「人口動態統計」による）、この比率は年々少しずつ増加している。また、出生体重が 1500g 未満の極低出生体重児の全出生に占める割合は約 1.1%で、ここ３年間は同じ値で推移している。2006（平成 18）年の新生児死亡率(出生 1000 人に対して)は 1.4 と世界のトップレベルであり、日本の医療の向上の中でも新生児・周産期医療の進歩はめざましいものがある。特に、最もリスクの高い超低出生体重児の死亡率は、1980 年の 55.3%から 15.2%にまで低下した。近年の各学会報告で指摘されているように、未熟児とその母親との母子関係成立には、正常出産の母子に比べて困難を伴う場合が多い。平成 10 年度～16 年まで科学研究費補助金を受け超・極低出生体重児を出産した母親と児との母子関係とそれに影響する要因に

ついて、分娩後から児退院後２年間にわたり、縦断的な観察と面接調査を実施してきた。今回更に事例数を増やし、調査期間を延長して継続した調査を行い、未熟児とその母親との1)将来の母子関係に大きく影響することが予測される初期の母子関係形成の経緯、2)母子関係形成過程に大きく影響を与える要因の究明を目指すことにした。

我々が行った過去の調査結果より、未熟児出産後の母子関係に影響する要因として、1)母親の妊娠中の状況、2)分娩時の状況と分娩が母親へ及す影響、3)未熟児を出産したことによる母親のストレス症状（身体・精神・社会的症状）、4)夫を中心とした家族関係と夫の行動・態度、5)児の発育・発達の影響が示唆された。今までの研究成果も踏まえ、未熟児を出産した母親への支援策を検討していくためにも、母子関係に影響を及す要因について更に究明することが必要になり、本研究を研究するに至った。

２．研究の目的

本研究は，未熟児（超・極低出生体重児）を出産した母親とその児の母子関係形成のための支援策を明らかにすることを目的とする。また，1)母親の妊娠中の状況（妊娠経過中の異常，胎児に対する受容），2)分娩時の状況と分娩が母親に及ぼした影響，3)未熟児を出産したことによる母親のストレス（身体・精神・社会的症状），4)パートナーを中心とした家族関係とパートナー（児の父親）の行動や態度及び児の同胞との関係，5)児の発育・発達の経過が母子関係に及ぼす影響とその変化について明らかにする。

３．研究の方法

(1)調査対象：岡山大学医学部・歯学部附属病院で出生した 1,500g 未満の低出生体重児とその母親。

(2)調査内容：妊娠中の状況，分娩時の状況と分娩が母親に及ぼした影響，分娩に対する印象･感想，出産後の母親のストレス症状（身体・精神・社会的症状）、パートナー（児の父親）を中心とした家族関係，パートナーの行動や態度，児の同胞との関係，児の発育・発達状態，母子関係（対児感情，対児行動）の変化，育児行動と育児へ印象と変化等。

(3)調査方法：半構成的面接法による聞き取り調査と直接観察法を用いる。調査の時期は，1)出産後から母親退院までの期間（母子入院期間），2)母親退院後、児のみの入院期間，3)児の退院後３～５年間（退院後１週間、１か月、６か月、１年、１年６か月、２年、２年６か月、３年、４年、５年）

調査場所は、岡山大学病院周産母子センター（産科病棟）、児が退院後は退院後の各家庭、小児科および小児神経科の外来検診時とする。

(4)倫理的配慮：

①調査を行う際に、研究目的、研究の参加についての自由な選択の保証、研究成果の公表等について十分説明し、調査対象者の同意・承諾を得る。

②.学会報告を行う場合にも、個人が特定されないように、倫理的な配慮を行う。

４．研究成果

今回、調査した症例数は 52 事例で、母親は初産婦 34 人（65.4％）、経産婦 18 人（34.6％）であった。児の在胎週数は 24～27 週が 17 事例（32.7％）、28～31 週が 24 事例（46.1％），32～35 週が 11 事例（21.2％）であった。生下時体重は、1,000g 以上 1,500g 未満の極低出生体重児が 22 人（42.3％）、1,00g 未満の超低出生体重児が 30 人(57.7％)であった。また、早期産に至った原因は、前期破水 17 事例、切迫早産 16 事例、妊娠高血圧症候群 15 事例であった。今回、調査した症例数は 52 事例であり、母親は初産婦 34 人

（65.4%），経産婦 18 人（34.6%）であった。児の在胎週数は 24～27 週が 17 事例(32.7%)、28～31 週が 24 事例（46.1%），32～35 週が 11 事例（21.2%）であった。生下時体重は、1,000g 以上 1,500g 未満の極低出生体重児が 22 人（42.3%）、1,00g 未満の超低出生体重児が 30 人（57.7%）であった。また、早期産に至った原因は、前期破水 17 事例、切迫早産 16 事例、妊娠高血圧症候群 15 事例であった。

(1)早期産になった原因は、前期破水や切迫早産が多く、妊娠期間中に胎児に対して否定的に受け止めていた者は、出産後や退院後も児への面会回数が少なく、児との愛着形成が困難な者や時間がかかる者が多かった。

(2)出産時，母親は過度のストレス状態であり、退院後も身体的・精神的なストレス症状が続く者がいる。

(3)初回面会時の母親の児に対する印象では、児に対して接近感情をもつ者は少なく、罪悪感をもつ者が多い。

(4)保育器から出ることや授乳を行うことは、母子関係確立や愛着形成の上で重要な機会となる。

(5)パートナーが非協力的な場合、母親は児に対して回避感情を抱きやすく、育児にも否定的な感情をもちやすい。一方、パートナーが協力的な場合、母親は児に対して接近感情をもちやすく、育児を肯定的にとらえる傾向にある。

(6)児の退院直後，特に母親は児の発育・発達に対する不安が大きく、経過と共にそれらの不安は軽減していった。しかし、検診時に児の発達状態を指摘されたり、気になる症状がみられた場合、母親は再び自責の念に陥る者が多い。

(7)児が退院後も、母親は児の状態について多くの不安・心配をもつ者が多く、それらは長期間母親の精神的な負担となっている。

(8)児の後遺症や障害がわかった場合、母親の動揺や不安は大きく精神的に不安定な状態になる傾向がみられた。

以上の結果から、未熟児を出産した母親への支援策について検討した。

①出産時母親は過度のストレス状態にあり、母親に対する心のケアが重要である。

②母乳分泌の維持は、母親の役割獲得の面からも重要であり、継続した母乳育児支援が必要である。

③母親と児との愛着形成や、パートナーを中心とした家族全体の関係づくりに向けた援助が重要である。

④児が退院後、母親は児の状態について多くの不安・心配をもつため、育児支援が重要であり、医療機関からの継続支援や医療機関と公的保健機関とが十分に連携することが重要である。

⑤児の発達経過の良否は母親に与える影響が大きく、母親への十分且つ正しい情報提供が必要となる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

①片山七穂、<u>大井伸子</u>、堀川容子、藤岡まゆみ、松井たみこ、<u>増山寿</u>、低出生体重児を出産した母親への援助、岡山県母性衛生学会誌、第 25 号、42-43 、2009、査読無.

②藤岡まゆみ、<u>大井伸子</u>、住田由美、山本美華、松井たみこ、<u>丸山秀彦</u>、吉永治美、河野古都恵、日下奈緒美、藥師文、山下香奈恵、NICU同窓会を開催して、岡山県母性衛生学会誌、第 24 号、72～73、2008、査読無.

③<u>大井伸子</u>、対早産児母親的援助、中華護理雑誌、第 40 巻、230、2005、査読有.

〔学会発表〕（計４件）

①大井伸子、片山七穂、松井たみこ、「低出生体重児を出産した母親の母乳育児についての検討」、第48回日本母性衛生学会、2008年11月7日、浦安市.

②Nobuko Ohi 、Sumiyo Yasukawa、Tamiko Matsui、Yoshie Ebata、,Importance of maternal care following premature deliviery by midwives、28th Triennial Congress International Confederation of Midwives、 2008年6月1日、Glasgow.

③大井伸子、藤岡まゆみ、安川純代、金田真美、松井たみこ、増山寿、低出生体重児を出産した母親への援助についての検討、第 47 回日本母性衛生学会、2007年10月12日、つくば市.

④大井伸子、小さないのちのための遠隔育児支援、日本遠隔医療学会学術集会、2007 年10月20日、岡山市.

６．研究組織

(1)研究代表者

大井　伸子（OOI　NOBUKO）

岡山大学・大学院保健学研究科・准教授

研究者番号：60155041

(3)連携研究者

増山　寿　（MASUYAMA　HISASHI）

岡山大学・医学部・歯学部附属病院・講師

研究者番号：30314678

丸山　秀彦（HIDEHIKO　MARUYAMA）

岡山大学・医学部・歯学部附属病院・助教

研究者番号：00379794